



**f-haiku**  
**2018**

Ferris University



# f-haiku 2018

Ferris University

- 夏薊／伊東伸孝 …… 2  
里神楽／西村 翠 …… 3  
月の海／川井京子 …… 4  
セミの殻／瀧澤孝子 …… 5  
群／中楯真美 …… 6  
文字をなぞりて／中村義和 …… 7  
木漏れ日／谷嶋睦夫 …… 8  
ポチポチ／丸矢一夫 …… 9  
ゆずり葉／小宮山眞知子 …… 10  
冬の日に／齋藤三和 …… 11  
小さき手／佐々木裕雄 …… 12  
曇天／清岡ひさ子 …… 13  
夜明け前／木村榮一 …… 14  
ぶらんこ／森田一弘 …… 15  
ぐいぐいと＋後記／吉野裕之 …… 16

夏薊

伊東伸孝

起重機の航空障害灯おぼろ  
実むらさきお砂をまぜていらっしやいませ  
六月の午後五時半の一号線  
弾くゆびのちいさく強し花柊  
梅雨の晴れ雲は低きを漂えり  
神様の骰子振ることも冬入り日  
夏薊はなしを聞かぬ男かな  
湾岸道補修工事の氷雨かな  
夕焼けや教授の部屋の段ボール  
車かと聞きてお屠蘇のひと雫  
秋の暮れ遠くのビルのまどあかり  
チャリ飛ばすファンキーな女子春隣

里神楽

西村 翠

ゆつくりと桜より出づ貨車の列  
ひとしきり円を描きて赤とんぼ  
土手におく小さき自転車蛇莓  
発掘の寺の礎 冬日和  
朝刊と一匹の蟻テーブルに  
さざ波の幾重ともなり冬うらら  
でこぼこの石のかいだん凌霄花  
めらめらと護摩の炎や初不動  
うづたかき僧院の古書秋暑し  
八方に福豆をまく宮司かな  
雨上がりの邯鄲の声闇深き  
ひよつとこのうなじの清し里神楽

月の海  
川井京子

寒夜いま鳥が冷たくなっていく  
雨ダレノ無謬におちて梅雨入りかな  
左義長の火焰の中に紙コップ  
喜雨の中鳥一羽みて砂の上  
梅の香に合格の絵馬十重二十重  
すずめ来てはと来て黙す炎天下  
沙羅咲ひてドロインダの裸婦がゐる  
忽暗のさきはアメリカ遠花火  
フルートのきらり青めく朧の夜  
仏像の謂れを解いて大花野  
音のないとほい凧みて聖五月  
月の海ふたたびねじ巻くオルゴール

セミの殻  
瀧澤孝子

夏帽子「子規」の名冠す野球場  
裸木に登る子どもや空の中  
花ごぎの織りめ残して昼寝かな  
枯芝の世界破りてもぐら塚  
公園をマリンバ響き夏の空  
くうき抱く黒水鳥のうく川面  
雨上がり水滴おちてセミの殻  
実南天たわわにしなり水盤に  
コンテスト親の古着の案山子かな  
若水や龍の口より渾渾と  
百貨店はや帯柄も聖夜かな  
お社の焚き上げのふだ初箒

群

中楯真美

本当のところわからず青嵐  
10月の空に呼吸は消えてゆく  
犬連れる道の真ん中ひきがえる  
いただいた野菜がごちそう冬の晩  
青梅やレシピ見つつへたを取り  
ぽっかりと空いた席にもお正月  
あじさいの群また群に始業ベル  
理を問質したり春一番  
川岸にただ一輪の彼岸花  
新しき靴履き駆ける春の午後  
放生会明かりに集う人と虫  
桜貝拾う指さき冷たくて

文字をなぞりて

中村義和

合わす手をまたすり抜けしサクラかな  
つぐ酒の常温なりて秋の風  
山笑う谷の向こうの隣り組  
版画家の便りの中の暦売り  
クレーンの又ひと伸びや葱坊主  
句会の子靴脱ぎ捨てて枯芭蕉  
山の雪遠くになりて夏に入る  
花板の客を送りて年の暮  
幼な子の文字をなぞりてかき氷  
同じ事いつも聞く母年惜しむ  
風はこぶ女声の高く運動会  
大寒に黒くもつ煮る鉄の鍋

木漏れ日  
谷嶋睦夫

木漏れ日が春まで届く温かさ  
遊び果て蒲団に寝入る健やかさ  
鮮やかに春菜を茹でるしお加減  
初雪に足あと残し母帰る  
雨晴れて咲きかけの梅手がとどく  
大掃除眠りが覚めた冬のクモ  
病室のバラいのちかけ一枝かな  
冬の夜を柑橘系の香に託す  
団欒の煙ひろがる秋刀魚かな  
冬の旅城の謂れを石に訊く  
凜と立つ天の高さや曼殊沙華  
目障りなただ一匹の冬の蠅

ポチポチ  
丸矢一夫

ポチポチと息子のみ来る去年今年  
キス釣れて白き魚体に黒い砂  
キャリー引く孫が案内す夏の駅  
畔の端かすかに香る麦の風  
法師蟬鳴きつくしたか往ぬる日ぞ  
冬の闇鍵に触れたり仏の下  
白のれん食っていくかやはしり蕎麦  
万両や冷雨のあとの鮮やけき  
赤と白育くまれたる新酒来る  
寒きかな知己なきひとと夜の駅  
庭に南風部屋はエアコン写経かな  
薄明かり冬のバス停椅子二つ

ゆずり葉

小宮山眞知子

ゆずり葉やみな元号のない暦  
秋澄むやアイヴィの根が現れる  
人去りて部屋深深と三日の夜  
行く秋や動かぬ鯉にパンの耳  
球根を掘り起こしたり春暮るる  
冬近し手に摺りこみしヨーグルト  
芍薬や雨の雫も棺に入れ  
なでしこの道と書かれた寒椿  
硯にはころりと受けし芋の露  
干し物を日向日向へ日短  
チケツトは栞になりて冷房車  
寒風のホームに遅延アナウンス

冬の日

齋藤三和

日陰抜け薄紅色や寒桜  
兎やら棲んでいるやら真白の野  
時雨来て前に現る白き傘  
君の文読み返しておる冬の夕  
爪切りの音さえ澄んで冬の朝  
秋の虫ひよろりと出でし大掃除  
目刺しの目失して尚もそこにあり  
年の暮れ雑踏のなか薩摩弁  
曇天に水仙の葉や一直線  
柚子いくつお湯に入れおる小さき手  
白鳥や泳跡残し声のなく  
枯れ枝や光の差してきらきらと

小さき手  
佐々木裕雄

はにかみて小さき手あはす初詣  
ほのぼのの蚩袋や母のこと  
幼子の両手かさねてお年玉  
雨やんで蟬の殻の目くつきりと  
日の長くなる挨拶に春近し  
疎遠なる写真捨てゐる夜長し  
ふわふわと畦道歩む春の人  
残る声我の鈴虫消えてゐる  
母よりの山独活嗅ぎて生き生きと  
老いていま楽しみ一つ冬木の芽  
佇んであをあをの田の目高追ふ  
夢ひとつ晴れて立ちたる除夜の鐘

曇天  
清岡ひさ子

詰襟のやや長き袖風光る  
産毛立つ枝豆のさや産直便  
収穫を待つ楽しさに緑雨かな  
曇天に鶏頭の紅咲きにけり  
曇天に黄色き葎の梅八分  
大空にのびるクレーン息白し  
実梅もぐ葉陰にひとつまたひとつ  
試し書き走るペン先クリスマス  
万緑やくもりガラスの色模様  
袖口にグーで隠す手寒の入り  
台風のかけらホームを走り抜け  
解体の瓦礫に広き冬の空



夜明け前  
木村榮一

田植機にまたがり田植え郭公の  
バケツ置き親を語らい迎え火の  
浴衣がけやぐら太鼓にせかされて  
夕時雨古道の片隅一里塚  
パソコンやあずきバー食う玉の汗  
朱を放ち木立にぶらり烏瓜  
万緑を切り裂く滝やイワツバメ  
目をこすり群がり囲む焚き火かな  
食卓や冷やしトマトの薄雲る  
干からびて鴟の贅をば吹く風の  
賑やかに旅支度かや秋つばめ  
通学児モコモコセータや背を丸め

ぶらんこ  
森田一弘

ぶらんこに揺られ揺られて雲までも  
ジャズメンのバッハの調べ冬銀河  
万緑に一本の道空はるか  
冬天に木魚の響き三回忌  
シェーバーの切れ味軽し涼新た  
冬あけぼの空・海分かつ一刷毛の朱  
秋の夕椅子持ち寄りて音楽会  
冬茜青富士不動墨絵雲  
秋の空五輪マーチのよみがえり  
西安の窓から望むローマの春  
退院を掃除して待つ冬日和  
ぶらんこやトロイメライにまどろみぬ

●ぐいぐいと

原初からある街のごと冬に入ることがつかりが落ちてをりけり冬の前の声が冬のはじめと思ひけりトイレットペーパーなくて小春かな母老いて冬が小さくなりけり君たちの影かもしれぬ十二月レコードをもらつて帰る冬日和繻帯は深まつてゆく冬のやう対象として冬をありわたしたち一月のフォルム高々ビルの上ぐいぐいとくじらとなつてしまひけり住職の小さな癖も春隣

後記

吉野裕之  
Hiroyuki YOSHINO

『Fhaiku 2018』は、フェリス女学院大学オーブンカレッジの講座「俳句の創作―日本語のすばらしさを学ぶ」（春学期・秋学期開講・各八回）の二〇一八年度の受講生による作品集です。

実は、前回の作品集は『Fhaiku 2015』として発行しました。つまり、二年ほどお休みしていたわけですが、今年度、受講生の方々から、また作品集をつくりたい、という声が大きくなってきました。とてもうれしいことです。

俳句の本質は、私たちの日常生活を豊かに実感すること。このことを基本に、講座は運営されています。当たり前といえば、当たり前のこと。しかし、ついうっかりと、忘れがちになること。

自由参加の一冊に、十四名が集いました。とてもよいものになりました。多くの方に読んでいただきたいと思います。なお、作品は姓のいろは順に掲載しています。



## f-haiku 2018

2019年3月31日発行

フェリス学院大学 生涯学習課

〒245-8650 横浜市泉区緑園 4-5-3

tel = 045-812-8390 url = <http://open.ferris.ac.jp/>

頒価 = 300円 (税込)

制作：アトリエ云